

O-054

山口,2017.11.16-17

移植する胚盤胞の選択基準見直しの試み

大浦 朝美¹⁾、冨田 和尚²⁾、佐藤 学¹⁾、橋本 周¹⁾、中岡 義晴¹⁾、森本 義晴²⁾

医療法人 三慧会 ¹⁾IVF なんばクリニック、²⁾HORAC グランフロント大阪クリニック

【目的】 当院では選択的単一胚盤胞移植(e-SBT)を行ってきたが、胚盤胞のどの評価基準を優先し移植胚として選択するか悩むことがあった。そこで移植胚の優先基準を検討し、胚盤胞移植において生産に影響を及ぼす評価因子は培養日数(D5 or D6)、栄養外胚葉(TE : A~C)、拡張ステージ(BL3~6)、内細胞塊(ICM : A or B)の優先順であることを報告した(2017年関西生殖医学集談会)。この優先基準に基づき 2015年から e-SBT を行ってきたので基準設定前後で比較した。

【方法】 患者同意の得られた 2013年1月~2014年12月(基準設定前:前群)に凍結融解単一胚盤胞移植を行った 396症例と 2015年1月~2017年2月(基準設定後:後群)に凍結融解単一胚盤胞移植を行った 485症例の臨床的妊娠率と流産率を比較した。また初回 e-SBT の臨床的妊娠率と流産率を前群と後群で比較した。患者年齢は 34歳以下を対象とした。

【結果】 前群と後群の妊娠率は 55.3% vs. 56.3%、流産率は 19.6% vs. 19.4%といずれも差はなかった。前群と後群の初回 e-SBT の妊娠率は 61.9%(60/97) vs. 66.9%(89/133)、流産率は 15.0%(9/60) vs. 16.9%(15/89)と有意差はなかった。すべての比較において患者年齢に差はなかった。

【考察】 移植優先基準を設定する前後で妊娠率と流産率に差はなく、基準を変更することによる影響はないと考えられた。基準を設定することにより移植胚の選択が容易になり、より早く移植胚を選択することができるようになった。今後も検討を続けて有効か評価していきたい。